

研 究 分 野	漁場環境	部 名	漁場環境部
課 題 名	大型クラゲ等有害生物出現調査及び情報提供事業（出現状況調査、ブイによる水温観測調査）		
予 算 区 分	委託（（社）漁業情報サービスセンター）		
試験研究実施年度・研究期間	平成19－23年		
担 当	篠原 由香		
協 力 ・ 分 担 関 係	青森県水産振興課・（社）漁業情報サービスセンター		

〈目的〉

本調査は、平成19年度「大型クラゲ等有害生物出現調査及び情報提供事業」の一環として実施した。大型クラゲの出現状況を、調査船による洋上調査、県内漁協・漁業者からの聞き取り調査等により迅速に把握し、大型クラゲの分布に関する情報を広く漁業者等に配信する。

〈試験研究方法〉

1. 洋上調査

試験船により、海洋観測時や沿岸資源調査時に目視調査を実施した。調査項目は出現の有無、個体数、傘径、表層水温等で、結果は漁業情報サービスセンターへ報告した。

2. 聞き取り調査

県内の漁協からの出現情報を水産振興課を通じて入手し、漁業情報サービスセンターへ報告した。

3. 水温ブイによる水温観測調査

深浦町大戸瀬漁協前沖に水温ブイを設置し、連続観測を実施した。収集されたデータは、電子メールにより漁業情報サービスセンターほか関係者へ配信された。

〈結果の概要・要約〉

1. 洋上調査

試験船開運丸及び青鵬丸により、本県日本海側沿岸から沖合域において調査を実施した。調査は19年9月～20年2月に計7回行った。

2. 聞き取り調査

青森県には9月上旬より来遊し、それ以降、5日毎に情報収集及び情報提供を実施した。1月に入るとほとんど出現しなくなり、1月末をもって調査を終了した。

3. 水温ブイによる水温観測調査

平成19年6月28日に、水温観測ブイを深浦町大戸瀬漁協沖水深30m地点に設置し、観測を開始した。

〈主要成果の具体的なデータ〉

1. 洋上調査

青鵬丸による沿岸から沖合域の観測時には、大型クラゲは目視されなかったが、底曳網には多数入網した。開運丸による沿岸域の調査では、1個体が目視された（表1）。

表-1 試験船による調査結果

月日	試験船名	海域	水深	表面水温	個体数	傘径	調査方法
9月2日	開運丸	日本海観測		22.4~25.6	0	—	目視
10月4~5日	青鵬丸	日本海観測		19.8~23.6	0	—	目視
10月27~30日	開運丸	日本海観測		13.6~19.8	1	50~60	目視
11月29日	青鵬丸	十三線沖	342	16.6	多数	—	目視
11月29日	青鵬丸	出来島沖	309	16.6	多数	—	目視
12月2~3日	青鵬丸	日本海観測		19.8~23.6	0	—	目視
1月8日	青鵬丸	日本海観測		12.4~12.8	0	—	目視
2月5日	開運丸	日本海観測		4.6~9.6	0	—	目視

2. 聞き取り調査

青森県では、昨年より5日早い9月10日に今年度初めて出現が確認された。海域別に見ると、日本海側では、11月上旬から断続的に大量入網があり、12月下旬がピークであった。津軽海峡側では、11月下旬にピークとなり、その後12月下旬に再び増加した。太平洋側では、11月下旬にピークを迎えたが、12月中旬以降、急激に減少した。陸奥湾内では、出現数は少なく、10月及び12月に少量入網があった。

3. 水温ブイによる水温観測調査

7月の観測開始当初は1m層20℃台、10m層18℃台、20m層17℃台。水温のピークは1m層が8月中旬で28.1℃、10m層及び20m層が9月上旬でそれぞれ25.2℃、24.9℃。その後降温が続いた。

〈今後の問題点〉

試験船での目視調査の結果、表層においては目視されない場合でも底曳網には入網するなど、深場に分布している場合があり、正確な出現状況の把握のため調査方法の検討が必要である。

〈次年度の具体的計画〉

平成20年度から「有害生物漁業被害防止総合対策事業」が実施され、その一環として今年度と同様の調査の実施が予定されている。

〈結果の発表・活用状況等〉

出現調査結果及び水温観測結果は、ウオダス No. 1566~No. 1615 に掲載された。また、漁業情報サービスセンターへ報告した情報は、同センターで「大型クラゲ出現情報」として取りまとめられたほか、東北海域の出現予測情報や水温の短期変動の把握における基礎データとして活用された。